

哲学カフェ@名古屋

2014年7月6日 11:00~13:00

テーマ：「哲学カフェで名前を呼び合うことは良いことか？」（メタ哲学カフェ 第四回）

場所：カフェぶーれ

進行：三浦隆宏さん（カフェフィロ/相山女学園大学）

レビュワー：安田清一郎

第四回となるこの日のメタ哲学カフェのテーマは「哲学カフェで名前を呼び合うのは良いことか？」でしたが、この問いはほとんど対話開始そうそうから、「哲学カフェで参加者が自己開示する（＝自分が何者であるかを開示する）のは良いことか？」という問いのシンボリックな表現のように一部の参加者（私含めて）には解されていました。ただ、この二つの問いは必ずしも同じではないということは早い段階で指摘され、それ以降は、（より技術的・表層的な）もともとのテーマよりも、より本質的な二つめの問いの方に議論が比較的集中したと思います。

また、「自己開示の是非は、哲学カフェをどういう場と理解するかによって変わる」という考えから、「哲学カフェとはどういう場か？（または、どういう場であるべきか？）」のようなさらに本質的な問いも、かなり早い段階から問われ出しました。むしろこの問いが、この日の対話の影のテーマとして終始参加者の皆さんに意識されていたように思います。

さらに、この「どういう場か？」の問いを持ち出した方は、そのとき同時に「組織とか集団というものを**コミュニティ**と**アソシエーション**の二種類に分ける社会学の考え方」をも提起されました。この方自身の言葉を借りて簡単に説明すると：

【コミュニティ】 どちらかという人間関係そのものが目的となっている集団。

【アソシエーション】 何か特定の目的があってそのために集まっている集団。例：会社。

ということです。その結果、「哲学カフェとはコミュニティ的な場か、アソシエーション的な場か？（あるいは、コミュニティ的な場であるべきか、アソシエーション的な場であるべきか？）」という、もう少し具体的な問いもたびたび問われていました。

ところで、この問いの背後で、多くの参加者（私を含めて）が次の①のような考え方をしていたようです。

- ① 自己開示し合うグループはコミュニティ的になる。従って、もし哲学カフェの参加者グループがアソシエーション的であろうとするなら、できるだけ自己開示は控えるべき。

振り返ってみるとこれは、このような考え方をしていたものたち自身についてとても示唆に富むものだったように思われます。当日は「名前」問題にせよ「哲学カフェという場」の問題にせよ、もっといろんな視野からの論点が浮上していたのですが、このレビューでは特にこの①について振り返ってみたいと思います。

まず、よく考えるとアソシエーションというのは必ずしも自己開示をしないわけではないように思われます。たとえば、もっとも典型的なアソシエーションはおそらく軍隊ではないかと思いますが、軍隊では（日本では往々にして会社でも）組織のメンバーたちは組織上の身分で相互に呼びかけ合い、そのような形で一定の自己開示をしています。これを考慮した上で、もし「自己開示」という点でコミュニティ/アソシエーションを特徴づけるとしたら、正確には次のようなことになるのではないのでしょうか。（説明の便宜上、順序を入れ替えますが。）

【アソシエーション】 グループの本来目的に則した自己属性以外の開示はしないグループ。

【コミュニティ】 グループメンバーのさまざまな自己属性が、特定目的などに制限されることなく自由に開示されるグループ。そして、そうした相互の自己開示自体が目的となっているようなグループ。（単に自己開示ばかりでなく、「自己開示効果」をもつコミュニケーションを通じてメンバーのさまざまな自己属性が形成もされる、ということを含めての目的、という方が正確なのかもしれません。）

こう考えると、当日のカフェ参加者が考えていたのは、もう少し厳密に言うとなら①ではなく次の②だったのかもしれません。

- ② グループの本来目的に関わらず（あるいはそれを持たないグループにおいて）メンバーが無制限に自己開示し合うと、グループはコミュニティ的になる。従って、もしあるグループがアソシエーション的であろうとするなら、グループの本来目的に関わらない自己開示はできるだけ控えるべき。一方、**哲学カフェという場にも特有の「本来目的」がある。哲学カフェ参加者の自己開示は、それがどんな種類のものであれおおよそこの「本来目的」にとっては無益か、あるいは有害である。よって、もし哲学カフェ参加者グループがアソシエーション的であろうとするなら、できるだけ自己開示は控えるべき。**

太字の部分は、当日の対話の表面上にはまったく出てこなかった話です。しかし、コミュニティ/アソシエーションという対概念を使いながらも大雑把には①のような考え方をしていたのなら、そうした参加者たちは、太字部分のような暗黙前提を介した②のような理路で①を受け止めていたのかもしれません。

もしそうだったなら、その「哲学カフェの本来目的」とは何なのでしょう？そしてそのような「本来目的」を有するとされる「哲学カフェ参加者グループ」とはどのような「アソシエーション」なのでしょう？

もしかするとこの日の対話は、私たち（哲学カフェ実践者）の多くが「哲学カフェという場」に対して暗黙のうちに抱いているある重要な期待ないし前提に気づくための貴重な手がかりを与えてくれていたのではないのでしょうか。。。